

推理エッセイ

苗野春彦

<728>

ダニー・ボーイ

太った娘

2.世界の終り

1945年7月

ポツダム宣

リトル・ボ

フ

お2次世界

S&H

タイトル：推理エッセイ（S & H）

文とイラスト：茜町春彦

前書き：

「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド（村上春樹著、新潮文庫版）」を読んでもと、沢山のメタファーもしくはメタファーらしきものが示されていて、また「解読できない暗号はない」と云う記述もあり、そうなのかもしれませんし、そうではないのかもしれません、尤も小説自体おもしろいので、それ以上言う事はないのですが、取りあえず試しに自分で謎をつかって、合っているかどうか分かりませんが、と云うよりも謎なのかどうかすら分かりませんが、勝手に解いてみました。

従って、小説の内容に言及しますので、あらかじめ御了承ください。

Q 1 & A 1

Q 1 :

「太った娘が黙ったまま、声を出さずに話す事」は何かのメタファーでしょうか？、と自分で問いを立てて自分で答えてみます。

A 1 :

まず、取り掛かりとして、〈936〉 〈1213〉 〈26〉と云う番号について考えてみます。これらは上巻23ページに示されている番号です。

引用しますと、

- それはともかく異様なくらいのっぺりとした内装のビルだった。私の乗ってきたエレベーターと同じように、使ってある材質は高級なのだがとりかかりというものがないのだ。床はきれいに磨きあげられた光沢のある大理石で、壁は私が毎朝食べているマフィンのような黄味がかかった白だった。廊下の両側にはがっしりとして重みのある木製のドアが並び、そのそれぞれには部屋番号を示す金属のプレートがついていたが、その番号は不揃いで出鱈目だった。〈936〉のとなりが〈1213〉でその次が〈26〉になっている。そんな無茶苦茶な部屋の並び方ってない。何かが狂っているのだ。

引用を終わります。

この文章自体は、無くても小説の本筋に支障の起きることがなく、とくに意味のない記述のように思えますが、「とりかかりというものがない」と書いているので、逆に取り掛かりがあると考えてみます。

そうしてみると、頭に浮かんだのが、〈26〉から連想して226事件です。この事件は鈴木貫太郎侍従長官邸が襲撃目標のひとつとなり、1936年2月26日に起きた事件です。とすると、〈936〉は1936年を示していると思えてきます。ならば、「〈936〉のとなりが〈1213〉」と書かれているので、〈1213〉とは1936年の翌年の1937年12月13日の事かと思えます。調べてみましたら、この日には南京陥落が起きていました。

これらの事から「〈 〉」の記号は第2次世界大戦頃の日付を示していると仮定してみます。そう思って読みますと、上巻31ページで〈728〉と云う番号が目にとまりました。この日付を1936年、37年、38年・・・と調べてみますと、1945年7月28日に鈴木貫太郎首相がポツダム宣言『黙殺』声明を発表していました。

よって、「太った娘が黙ったまま、声を出さずに話す事」は鈴木貫太郎首相のポツダム宣言『黙殺』声明のメタファーと推理します。

戦争中の出来事が物語の中で示されていると考えて、さらに問いを立ててみます。

Q 2 :

「ポケットの中の小銭の合計額の減少」は何かのメタファーでしょうか？

A 2 :

小銭の計算を間違ふ記述が上巻 18 ページと 20 ページにあります。

引用しますと、

- そのときの私のポケットの中には五百円玉が 3 枚と百円玉が 18 枚、五十円玉が 7 枚と十円玉が 16 枚入っていた。合計金額は 3810 円になる。（上巻 18 ページ）
- 私は壁にもたれて両手をポケットにつっこみ、もう一度小銭の計算をはじめた。3750 円だった。何の苦労もない。あっという間にすんでしまう。計算が違っている。どこかで私はミスをしてしまったのだ。手のひらに汗がにじんでくるのが感じられた。私がポケットの小銭の計算をしくじったなんてこの三年間一度もないことだった。（上巻 20 ページ）

引用を終わります。

小銭の枚数から、東京裁判の死刑、禁固刑、公判中病死及び審理除外者数の事かと思いましたが、違うようです。さらに読み返してみると、普段あまり見かけない表現が目に残りました。

引用しますと、

- 私が言いたいのは特殊な現実の中にあっては—というのはもちろんこの馬鹿げたつるつるのエレベーターのことだ—非特殊性は逆説的特殊性として便宜的に排除されてしかるべきではないか、ということである。（上巻 18 ページ）

引用を終わります。

念を押すように『特殊』と言われて、連想したのは、アインシュタインの特殊相対性理論です。アインシュタインは、質量の減少がエネルギーに変換されるという理論を唱えました。そして、その応用として原子爆弾が開発されました。

よって、「ポケットの中の小銭の合計額の減少」は原子爆弾のエネルギーの基は質量の減少であることのメタファーと推理します。

Q 3 :

「三年間一度」「ダニー・ボーイ」「太った娘」は何かのメタファーでしょうか？

A 3 :

上巻20ページに「三年間一度」と云う記述があります。

また、主人公「私」はエレベーターの中で「ダニー・ボーイ」と云う曲を口笛で吹いています（上巻14ページ）。

そして、その主人公「私」がエレベーターを降りた時、待っていたのは「太った娘」です。

これらは、原子爆弾に関連していると仮定して考えてみます。

そしてまた、上巻226ページには原子爆弾についての記述があります。

引用しますと、

- これはいわば科学を超えた問題だな。ロス・アラモスで原爆を開発した科学者たちがぶちあたったのと同種の問題だ

引用を終わります。

このロス・アラモスで行われた史上初の原爆実験の暗号名は「トリニティー（三位一体）」でした。また、広島に投下されたウラン型原子爆弾の暗号名は「リトル・ボーイ」でした。さらに、長崎に投下されたプルトニウム型原子爆弾の暗号名は「ファット・マン」でした。

よって、「三年間一度」「ダニー・ボーイ」「太った娘」は原子爆弾の暗号名のメタファーと推理します。

Q 4 & A 4

Q 4 :

「世界の終り」は何かのメタファーでしょうか？

A 4 :

史実としては、1945年7月16日にロス・アラモスで原爆実験が成功したと報告を受けた米国トルーマン大統領は原爆製造の指令を出しました。そして、1945年7月28日の鈴木貫太郎首相のポツダム宣言『黙殺』声明のすぐ後、8月6日、9日に広島、長崎へ原爆が投下されました。

小説としては、口笛で「ダニー・ボーイ」を吹いていた主人公と「太った娘」が〈728〉と番号のついた部屋へ入ったすぐ後、「世界の終り」と題された、影の消滅する第2章へと進んでいきます。

以上の事より、「世界の終り」は第2次世界大戦の終わりの頃に原子爆弾が投下されたことのメタファーと推理します。

いかがでしょうか、自分でも無理矢理かなと思うところもありますが、今回はここまでとさせていただきます。対応表を次のページに示してあります。また「なぜ、太った娘の服とハイヒールはピンクなのか？」と云う問いも考えましたが、これは別途機会があれば「不思議の国のアリス（ルイス・キャロル著）」と絡めて、推理したいと思います。

追記：

書店で「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」の英訳版を立ち読みした時の事なので、うろ覚えですが、確か、「太った娘」の「太った」を翻訳者は上品に「plump」と訳していたと記憶していますが、もし村上春樹氏自身が英訳することになって「fat」を使わない事があるとなれば、今回の推理はハズレです。

| 小説 | 推理 |
|---------|---------------------|
| <936> | 1936年頃のこと |
| <1213> | 1937年12月13日南京陥落 |
| <26> | 1936年2月26日 226事件 |
| 逆説的特殊性 | 特殊相対性理論 |
| 小銭の減少 | 質量の減少 = 核エネルギー |
| ロス・アラモス | 原爆の暗合名 |
| <728> | 1945年7月28日 鈴木首相 |
| ポッド宣言 | ポッド宣言「黙殺」声明発表 |
| ダニー・ボーイ | リトル・ボーイ (ウラン型) |
| 太った娘 | ファット・マン (プルトニウム型) |
| 2.世界の終り | が2次世界大戦の終り |
| 影のない街 | 影も消滅した広島・長崎 の市街地 |

追補を行ないました。（2016年9月22日）

目次：

Appendix01

不思議の国のアリス（ルイス・キャロル著）との比較を行ないました。

Appendix02

メタフィクションとして、世界の終りとハードボイルド・ワンダーランドを考察しました。

Appendix03

『やみくろ』とは何者でしょうか？

Appendix01

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の中の『ハードボイルド・ワンダーランド』の部分の粗筋を次に示してみます：

- 私（主人公）はピンク色のスーツの若い女に促がされて地下の世界へ行き、あれこれあって、そして最後に眠りついて夢の世界へ入って行く。

『不思議の国のアリス』の粗筋を次に示してみます：

- アリス（主人公）はピンク色の目のウサギの後を付いて地下の世界へ行き、あれこれあって、そして最後に眠りから覚めて夢の世界から戻る。

よって、『ハードボイルド・ワンダーランド』の部分と『不思議の国のアリス』は骨格として同じ構造をしていると思います。

Appendix02

メタフィクションとして何が言えるか、3章に出てくる『ブレインウォッシュ』の事柄から考えてみました。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を普通に読みますと、そのストーリーは：

- 『博士（準主人公）』は『私（主人公）』の脳の中に数値を埋め込み、それを解除するパスワードが『世界の終わり』である。

となると思います。

そして、メタフィクションとしては：

- 『著者（村上春樹氏）』は『私たち（本を読んだ者）』の脳の中にメタファーを埋め込もうとしていて、それを解除するパスワードが『第2次世界大戦の終わり』である。

と読めると思います。如何でしょうか。

Appendix03

幾つかの事柄がメタファーであると仮定して、推理してみます。

- 21章（上巻、p463）で雨ふりの話の直前に出てくる『マービン・ゲイ』は、広島に原爆を投下した爆撃機のニックネーム『エノラ・ゲイ』のメタファーだと思います。
- 33章（下巻、p285）に出てくる『レンタ・カー』は、長崎に原爆を投下した爆撃機のニックネーム『ボックス・カー』のメタファーだと思います。
- 39章（下巻、p383）に出てくる『綿くずのような白い雲』は、原爆の『きのこ雲』のメタファーだと思います。
- 39章（下巻、p388）に出てくる『鳩』『小さな女の子』『身なりの良い母親』『公園』は、広島『平和記念公園』のメタファーだと思います。
- 39章（下巻、p403）で雨ふりのことを考えた直後に出てくる『激しい雨』は、原爆の『放射能の雨』のメタファーだと思います。

以上の推理が当たっていれば、『組織』と『工場』は『連合国』と『同盟国』のメタファーと言えるでしょう。

そうであれば、『やみくろ』は『ソビエト連邦』を意味するような気がします。如何なものでしょうか？

後書き

改訂について：

追補を行ないました。

参考文献について：

次の文献を参考にしました。

- 世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド（上）：平成22年4月10日発行 村上春樹著
新潮文庫
- 世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド（下）：平成22年4月10日発行 村上春樹著
新潮文庫
- 解明・昭和史 東京裁判までの道：2010年4月25日第1刷発行 筒井清忠編 朝日選書
- 日本の歴史23 帝国の昭和：2011年7月20日第2刷発行 有馬学著 講談社学術文庫

CG画像：

次の画像処理ソフトウェアを使用しました。

- ArtRage 3 Studio Pro アンビエント社
- Photoshop Elements 10 アドビシステムズ株式会社

著者：

茜町春彦（あかねまちはるひこ）と申します。

2004年より活動を始めたフリーランスのライター&イラストレーターです。

作品が社会の進歩に多少なりとも寄与することを願いながら、日々制作を行なっています。

また、下記WEBサイトに於いても、デジタル作品を公開しております。

- YouTube （動画共有サイト）
- Google+ （ソーシャルネットワークサービス）
- 楽天Kobo電子書籍ストア （ネットショッピングサイト）
- はてなブログ （WEBLOGサービス）

その他：

製品名等はメーカー等の登録商標等です。

本書は著作権法により保護されています。

2013年7月発行

2016年9月22日改訂

推理 エッセイ (S & H)

<http://p.booklog.jp/book/74445>

著者：茜町春彦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akaneharu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74445>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74445>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ